

不登校傾向児童生徒の自己肯定感向上を目指した 社会教育からのアプローチ[†] ～秋田県立少年自然の家における「ふれあいキャンプ」の実践から～

川田 貴之*・小池 孝範**

秋田県教育庁生涯学習課*・秋田大学教育文化学部**

秋田県における不登校の児童生徒数は年々増加傾向にあり、関係者が様々な支援を継続している。不登校の児童生徒には、自己肯定感や自己有用感が特に低い傾向が見られたり、自然体験・社会体験・リアルな生活体験等が少なかったりすることから、孤独感や他者とのコミュニケーションに対する不安感を強く抱いている者も多い。

そこで、秋田県教育庁生涯学習課（以下、生涯学習課）では、少年自然の家が有している機能を生かし、参加者の自己選択と自己決定を基盤としながら、無理なく周囲とのコミュニケーション方法を習得していけるような体験活動プログラムを実践した。その成果として、本プログラムが、参加した児童生徒の自己肯定感を向上させるきっかけとなったことに加え、不登校に対して生涯学習・社会教育からのアプローチを取ることの有効性と重要性を確認できた。

キーワード：不登校、自己肯定感、ふれあいキャンプ、少年自然の家、社会教育

1 はじめに一問題の所在

不登校は現代的な教育問題の一つであり、その原因は多岐にわたっている。文部科学省の「令和元年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」によれば、令和元年度の全国の小・中学校における不登校児童生徒数は、181,272人（前年度164,528人）であると報告され、過去最多となっている。同調査において、小・中学校全体での不登校の要因の上位3項目として、「無気力・不安」（39.9%）、「いじめを除く友人関係をめぐる問題」（15.1%）、「親子の関わり方」（10.2%）が指摘さ

れている。さらに、55.6%は90日以上長期欠席となっており、依然として長期に及んでいる数も多い。

また、不登校は「心の問題」として論じられることが多かったが、近年の「子どもの貧困」が社会問題として取り上げられたこと等を契機として、「貧困家庭の不登校」も問題として指摘されている〔梶原, 2020: 2〕。

秋田県については、小・中学校における1,000人当たりの不登校児童生徒数は、平成28年度が9.1人（全国13.5人）、平成29年度が10.8人（同14.7人）と全国で最も少ない状況が続いていたが、平成30年度には14.1人（同16.9人）、令和元年度には15.0人（同18.8人）となり、全国平均を下回ってはいるものの、その数は増加傾向にあり、また全国の増加率を上回っている¹⁾。

秋田県教育庁では、義務教育課を中心とした「不登校・いじめ問題等対策事業」により、スクールカウンセラー、広域カウンセラー、スクールソーシャルワーカーの配置、専用相談電話の設置等を通じて、

2021年1月12日受理

[†]Takayuki KAWATA* and Takanori KOIKE**, A Study of An Effective Approach to Improving self-affirmation for School Refusal Children by Social Education: Based on the Practice of "FUREAI camp" at Akita Prefectural Youth Outdoor Learning Center

*Lifelong Learning Division, Akita Prefectural Bureau of Education.

**Faculty of Education and Human Studies, Akita University.

教育相談体制の整備・拡充に努めているが、昨今の不登校の状況に対しては、従前の生徒指導・教育相談の領域からのアプローチのみならず、多面的・重層的に不登校に向き合う機会の創出や支援の必要性が指摘されている。

国立青少年教育振興機構をはじめ、多くの機関や青少年教育施設の調査研究と実践により、自然体験や宿泊体験等の多様な体験活動が、青少年の自立心・連帯感や仲間意識を育む効果が高いことは実証されており、秋田県においても県立少年自然の家を中心として、これまで様々な体験活動の機会の充実を図ってきた²⁾。

不登校傾向児童生徒が、非日常的または課題解決的な体験活動に直接関わることは、自己肯定感の向上に結びつくとともに、社会性や協調性を育むことにもつながることから、生涯学習課では、不登校に対する生涯学習・社会教育領域からのアプローチとして、県立少年自然の家に有する豊かな自然環境や機能を生かし、主に適応指導教室等を利用している児童生徒を対象とした「ふれあいキャンプ」という事業を実施した。

本論文では、令和元年度及び令和2年度の事業実践について、関係者へのアンケート等からその成果や課題について明らかにし、今後の事業の企画・立案・プログラム開発に生かすこと、また、取組についての検証と情報発信を目的とする。

2 「自尊感情」と体験活動に関連する政策動向について

「自尊感情」は「心理学用語Self Esteemの訳語として定着した概念」であり、一般的には、「自己肯定感」「自己存在感」「自己効力感」等の語と、ほぼ同じ意味合いで用いられることが多い。“Self Esteem”は、その原義からすれば「自己評価」であり、「元々は、プラス面もマイナス面も含んだ中立的な語」である。したがって、自尊感情の語は厳密に言えば、「自己肯定感」や「自己有用感」といった、主として「プラス面」を指す語を含む、より広い意味を持ったものである〔国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター、2015：2〕。ただし、本論文では、一般的な意味での自尊感情の用法に鑑み、「自己肯定感」や「自己有用感」を含み、かつ主として「プラス面」を指すことばとして用いていく。

さて、日本、米国、中国、韓国の4か国の高校生を対象に2014年に実施された意識調査によれば、「自分について」の調査結果から、日本の高校生の「自尊」の因子得点が低く、他の3か国と大きな開きが見られたことが報告されている〔国立青少年教育振興機構、2015：33〕。この調査結果は、衝撃を持って受け止められ、自尊感情を取り上げる際の枕詞のように引用されてもいる。

本報告書では、この結果をふまえ、日本の高校生は「自分に対する自尊感情が低い。自分に自信を持っていない。人生の目標がはっきりしていない。／今勉強しているのは希望する仕事に就くためである。これ自身は前向きである。しかし、そのことが自尊感情を高めることになってないし、新しい家族関係や社会との関わりの構築までに広がっていないのが気になる」と分析し、課題も指摘している。その上で、他の質問項目とのクロス分析を通して、「自然体験」が、「正義感・思いやり」、「自尊感情」、「自立意識」の向上にプラスに作用していることを示した上で、「高校生の体験活動が生き方を前向きにし、自信を持たせる」とし、最後に、「自然体験活動」の意義を以下のように概括している。

日本の高校生の自然体験は二極化し始めている。これを防ぎ、多くの高校生たちに体験活動を増やすチャンスを用意する必要がある。今の「内向き」志向の高校生を「外向き」にさせるには、行動半径を広げ、多くの人との交流をする様々な体験を積み重ねなければならない。それが早道である。

〔国立青少年教育振興機構、2015：65〕

以上は、国際比較に基づいた分析であるが、経年変化に基づいた分析もある。これも国立青少年教育振興機構が平成24（2012）年度に実施した「青少年の体験活動等に関する実態調査」である。この調査の報告書では、平成10年、平成17年、平成18年から平成24年の調査の結果をふまえた分析、まとめがなされている。

まず、14年間の変化として、「自然体験活動」と、「生活体験」の「生活技能と人間関係」において二極化が進んでいること、「生活体験」の「お手伝い」「生活習慣」では増加傾向にあることを挙げ、その上で、「自然体験と生活体験のどちらが『先か』は

はっきりしない」ものの、「学年」，「領域を問わず自然体験をしている者ほど生活体験も多くしている」ことを提示し，両者が密接な関係にあるとする。さらに，「自己肯定感」については「学年と共に低下」し，特に中高生になると急激に低下すること（小4：30.7%，小6：20.9%，中2：8.9%，高2：7.3%），また，調査の対象となっている平成18年から平成24年の調査でも同様の傾向にあることが報告されている。

加えて，自己肯定感は，「体力に自信がある」という項目との結びつきがあること，その背景については，「体力には自信がある」は，「スポーツ能力，健康，体調，食欲，耐力などが，総合的に絡み合ったもの」である可能性が示唆されている。

以上の調査結果と分析をふまえ，報告書では，(1)「自然体験と自己肯定感結びつく」こと，(2)「生活体験と自己肯定感結びつく」こと，そこから，(3)自己肯定感を育んでいくためには，「自然体験と生活体験を多く重ね，とにかく自分の体力に自信を持たせる」ことが重要であること，と結論されている[国立青少年教育振興機構，2014：191-193]。

この調査結果をもとにしながら，平成28（2016）年度の「文部科学白書」では，巻頭において「子供たちの未来を育む豊かな体験活動の充実」を特集し，青少年の体験活動の意義について，「多くの人と関わりながら体験を積み重ねることにより，『社会を生き抜く力』として必要となる基礎的な能力を養う効果がある」と考えられていること，また，「自分自身との対話，実社会との関わり等を考える契機」となること等が示されている[文部科学省，2017：30]。

本論文で検討する事業も，体験活動を通じた自己肯定感向上に向けたものであるが，その対象は不登校傾向児童生徒である。不登校については，その原因や状態は複雑化・多様化しているが，不登校傾向児童生徒と自尊感情の低さとの関連についてはしばしば指摘されるところである。地井（2011）は，中学生の登校回避感情と自己肯定意識の関連について検討し，「中学生の登校に対する意識は，自己意識の肯定性と全体的に強い関連があること」を示唆している。さらに，「1，3年生に比べ2年生の『自己受容』が低い傾向」があること，男子では「友人関係における孤立感傾向」が，女子では「自己閉鎖性・人間不信」が有意な要因となっていること等を示している[地井，2011：69-71]。

先の国立青少年教育振興機構の調査結果とあわせて考えるならば，不登校傾向児童生徒にとって，体験活動は，その自尊感情の育成に一定の効果が期待できるだろう。以下では，本事業の取組について紹介するとともに，そのねらいと成果について，参加者の変容の観点から検討してみたい。

3 事業の概要と参加者の変容から見た本事業の成果と課題

本事業は，文部科学省から「体験活動等を通じた青少年自立支援プロジェクト 自己肯定感・主権者意識育成プロジェクト」の委託を受け，「対象者の特性に応じたモデル的な事業」として実施したものである³⁾。

秋田県の県立少年自然の家は，県北地区・中央地区・県南地区にそれぞれ存在しているが，今回は，県北地区の大館少年自然の家（大館市）と，県南地区の保呂羽山少年自然の家（横手市）の2施設を会場とした。

(1)令和元年度のふれあいキャンプについて

【実施体制】

事業の初年となる令和元年度は，できるだけ多くの関係者及び専門家から意見をうかがう機会を設けた。

主に，不登校傾向児童生徒が抱える課題やニーズについての協議や，事業実施後のアンケート分析等を通じて，自己肯定感向上のために効果的なプログラムかどうかを検証するとともに，事例研究や普及啓発を行うための「自己肯定感向上プロジェクト推進会議（以下，推進会議）」を設けた。会議の構成員として，学識経験者，PTA関係者，会場施設所長，義務教育課及び特別支援教育課指導主事，県総合教育センター指導主事に委員を委嘱した。

また，具体的な体験活動プログラムの企画・立案や関係団体との連絡調整，活動への支援，アンケートの分析と検証を行うため，会場施設ごとに「プログラム企画委員会（以下，企画委員会）」を設けた。委員には，少年自然の家協働会議会長⁴⁾，少年自然の家が所在する市町村教育委員会の指導主事や適応指導教室の指導者，教育事務所の指導主事（生徒指導担当・特別支援教育担当）やスクールソーシャルワーカー（以下，SSW），少年相談センター職員等を委嘱し，企画委員会には，少年自然の家所長と職員，教育事務所の主任社会教育主事も出席し，プロ

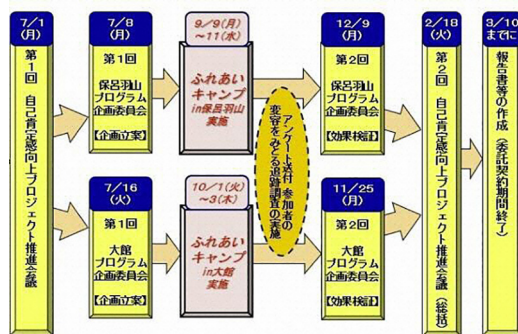


図1 令和元年度の事業スケジュール

プログラムの指導の実際について協議した。

このような実施体制のもと、図1に示したようなスケジュールで事業を実施することとなった。

【事前準備とプログラム立案の留意点】

推進会議及び企画委員会では、様々な協議がなされたが、最も根源的な問いとして、「そもそも本事業では自己肯定感をどう捉えるか」「どのようにしてその向上を測るか」という課題があった。

委員からは、「キャンプや体験活動の際に、様々な場面で他人とふれあって感じる感情は、直接的に『自己肯定感』を育むというよりも、他者に自分が必要とされているという『自己有用感』を育む場合の方が多くはないか」という意見や、「自分で決めた目標に対して、どのような努力をしたかということ客観的に把握できるような評価を行うためには、自分なりに参加の目標を定め、その達成感を実感として得られるプログラムが大切ではないか」という意見が出された。

そこで、本事業においては、「自分自身でチャレンジすることを設定し、責任をもって取り組める児童生徒」あるいは「達成できたことや他者が自分を助けてくれた経験を喜び合ったり認め合ったりできる児童生徒」の姿の中に、自己肯定感や自己有用感を含む自尊感情の変化を見取ることとした。

また、その手法としては、主に、参加者がしおりの「振り返りシート」に記述する個別の変化を分析するとともに、保護者・適応指導教室の指導者から参加者の事業後の変容を追跡調査で把握することとした。

具体的なプログラム立案上の留意点としては、申込みの際に参加希望者がハードルに感じるものが少なくなるように、表1のような様々な工夫をするこ

表1 事業実施に当たり留意・工夫したこと

①会場	利用団体・学校等がない時に、施設を貸し切って行う。
②交通手段	現地集合・解散の他、最寄り駅から会場まで送迎バスを運行する。
③指導者	少年自然の家、生涯学習課の社会教育主事その他、適応指導教室の指導者、教育事務所のSSWにも協力を要請。また、ピアカウンセリングの活動を行っている大学生にメンターを依頼する。
④指導上の役割	<ul style="list-style-type: none"> ・社会教育主事：生活面での相談と指導やプログラムの進行等 ・適応指導教室の指導者やSSW：心理面でのケア、生活面における変化の見取り、個別の相談等 ・メンター：活動のパートナー、しおりへのコメント記入等
⑤指導上や申込みにおける留意点	<ul style="list-style-type: none"> ・事前に指導上留意すべき参加者の情報等があった際には、指導に当たる職員やメンター間で共有する。 ・原則として、申込みは適応指導教室（または教育委員会）ごととし、参加しやすい雰囲気の醸成や確実な連絡体制の確保を行う。
⑥プログラムの内容	<ul style="list-style-type: none"> ・個人の興味や関心に応じた選択プログラムを取り入れ、参加へのハードルを低くする（日帰りや部分参加も可能とする）。 ・活動を詰め込みすぎず、余裕のある時間配分を心掛ける。

ととした。これにより、参加者の興味・関心に基づくフレキシブルなプログラムの実現と、実態に応じたサポートが可能となった。

【事業当日の様子】

保呂羽山少年自然の家（県南・横手市）での実践

先行して実施した保呂羽山少年自然の家においては、図2の左図に示した2泊3日のプログラムを実践した。9名が参加し、このうち6名は宿泊を伴う全日程に参加した。参加者の中には、家を出る際に不安定な状態となってしまう者もいたが、「交流ゲーム」を通じて周囲とコミュニケーションを取ることによって、徐々に落ち着きを取り戻していた。

「お家の人や先生をカレー・ディナーに招待しよう」というプログラムでは、調理活動が苦手な者への配慮から、招待状の作成・配達という役割も選択できるようにしていたが、全員が調理係を選択し、分担して作業を進めることができた。中には初めて

9月9日(月)【1日目】		9月10日(火)【2日目】		9月11日(水)【3日目】		10月2日(水)	
★駅から送迎バスに乗るか 現地集合かを選んでね!		7:00 起床・部屋掃除	7:00 起床・部屋掃除	7:00 起床・部屋掃除	7:00 起床・部屋掃除	時間	内容
		7:30 朝食(館内食)	7:30 朝食(館内食)	7:30 朝食(館内食)	7:30 朝食(館内食)	9:00	入所・開会式・ガイダンス
13:30	入所・開会式 事前アンケート	8:00	自然と遊ぼう 「カヌー」と「化石掘り」 どちらが楽しそうかな?	8:00	写真立てをつくろう! キャンプの思い出をお家にかざってみよう!	9:15	焼き板工作に挑戦しよう! [レクホール]
14:00	交流ゲーム	12:00	昼食(館内食)・休憩	11:30	事後アンケート	11:10	バーベキューの準備をしよう
15:00	お家の人や先生をカネー・ ディナーに招待しよう 私は「調理係」と「招待状 配達係」のどちらで活動し ようかな?	14:00	バーベキュー・パーティー のメニューを考えよう 僕は「買い出し係」と「飾り つけ係」のどちらで活動 しようかな?	12:00	閉会式 退所	11:40	昼食 バーベキューを楽しもう!
18:00	夕食(カレー)	18:00	夕食(バーベキュー)	※ 今回の宿泊は、少年自然の家 館内泊です。		12:30	みんなで後片付け
18:00	キャンプファイヤー & 星座観察タイム	18:00	館内スペシャル ナイトハイク!	※ 天候等によりプログラムが 変更になることがあります。		13:10	閉会式
20:30～入浴等 22:00 就寝		20:30～入浴等 22:00 就寝				13:25	退所

図2 令和元年度のふれあいキャンププログラム内容
(左図：保呂羽山・事業広報チラシより抜粋，右図：大館・実際に実施した短縮プログラム)



図3 キャンプファイヤーの様子(保呂羽山)

マッチで火をつける体験をした者もいたが、怖がらずむしろ積極的に活動に参加していた。

夕食後は、外部講師を招いての「星座観察タイム」、そして初日のクライマックスとして「キャンプファイヤー」を実施した。広大な星空を見上げたり、大きな炎を間近に見たりする経験は貴重であり、充実した時間となっていることを看取できた。

2日目は、この施設で人気の高いプログラムであるカヌー体験を取り入れた「自然と遊ぼう」という活動からスタートした。ただし、このようなアクティブな活動よりも、集中力を発揮して取り組む活動の方に魅力を感じる参加者への配慮から、化石掘りも選択できるようにするなど、動と静のバランスも考慮した。その結果、「化石掘りだけに参加したい」という希望が寄せられ、「自分自身でチャレンジすることを設定し、責任をもって取り組む」ことを体験した参加者もいた。

「バーベキュー・パーティーのメニューを考えよう」というプログラムでは、社会体験活動として買

い物体験を取り入れた。(買い物に出掛けず、会場の飾りつけを担当する役割も用意していたが、全員が買い出し係を選択した。)

「友人の好みは何か」「予算はどのくらいか」などを考えてメニューを決め、施設のバスに乗車して近隣のスーパーまで買い物に向かった。店内でも、「どの商品が安い」「買いたい商品はどこにあるか」など、係の仲間とコミュニケーションを取りながら、協力して買い出しを行う姿が見られた。施設に戻り、調理をして全員でバーベキューを楽しんだが、自分たちで決めたメニューを味わうことができた喜びは格別のものであった。

また、「館内スペシャルナイトハイク」は屋外のナイトハイクとして実施できた他、最終日の「写真立てをつくろう!」では個性豊かな作品ができ上がり、お土産として持ち帰ってもらうことができた。

印象的だったのは、閉会式の前に、適応指導教室の指導者の方がサプライズでギターと歌のプレゼントをしてくださり、皆で歌を歌って気分を高めることができたことと、2泊3日お世話になったメンターに対して、自ら手を挙げて御礼を述べてくれた参加者がいたことである。この生徒は他者とのコミュニケーションに苦手意識を抱いており、自分の感情を周囲の前で表現することはハードルが高かったかもしれないが、精一杯自分なりの言葉で思いを伝えていた。短期間のキャンプながらも、児童生徒の成長にふれることができた場面であった。

大館少年自然の家(県北・大館市)での実践

大館少年自然の家においても、多泊による自己肯定感の醸成を企図し、当初は2泊3日のプログラムを立案したが、宿泊への不安や負担感からか、宿泊

希望者がいない状況であった。そこで、図2の右図にあるような1日に短縮したプログラムを実践することとした。5名の申込みがあったが、実際の参加者は4名であった。

キャンプ当日は、朝からの活動であったことと、参加者全員が遠方から参加したこと等も重なり、開会式の際は硬い表情も見受けられた。しかし、「焼き板工作に挑戦しよう!」というプログラムでは、集中力を保ちつつ周囲と協力して作業を進める必要もあったため、徐々に会話が生まれたり笑顔が見られたりした。オリジナルのデザインで工作ができ上がった際には、非常に満足した表情を見せていた。



図4 焼き板工作の様子 (大館)

本事業では、看護学や福祉学を学びながら、ピアカウンセリングの活動を行っている大学生にメンターを依頼したが、参加者とメンターとの関わりが深まり、信頼関係が構築されると、参加者が活動に積極的に参加したり自ら発言したりする様子がうかがえた。身体を動かしたり、集団の中でコミュニケーションを取ったりすることが苦手な参加者もいる中で、本人の立場に寄り添いながら活動への参加を後押ししてくれる同年代のメンターによるサポートは非常に重要かつ効果的であった。

「バーベキューを楽しもう!」では、食材の調理方法に興味を抱き、率先して調理活動に参加したり、試行錯誤しながらバーベキューを楽しんだりする様子が見られた。自分の食べたいものだけではなく、周囲に勧めたり焼き加減を確認したりする中で、様々なコミュニケーションも生まれていた。

また、閉会式の際には職員がオカリナ演奏を披露した。この施設では、オカリナ音楽祭が恒例の行事となっており、毎年それを楽しみにしている施設利

用者も多い。参加者には、「またいつか体験活動に親しみに来てほしい」「いつでも待っているよ」というメッセージが伝わったようだ。



図5 閉会式の様子 (大館)

【両プログラム実践の成果と課題】

事前に適応指導教室の指導者に聞き取りを行ったところ、「学校の集団宿泊行事に参加できず、今回のキャンプを修学旅行のように楽しみにしている」という声や、「自然の家を初めて利用する子どももいるので、短時間でも自然の家で過ごすことができたという実感や喜びを味わってほしい」などの声が寄せられていたので、今回の体験活動が参加児童生徒にどのように受け止められたかが重要な点であった。

保呂羽山少年自然の家の事業に参加した児童生徒のしおりには、以下のような記述が見られた。

- ・(あなたが、今日の自分に声を掛けるとしたら…という問いに対して)5年生のときより作業がしっかりできています。
- ・交流ゲームが不安だったけど、周りの人たちがやさしくて初めて会った人とも仲良くなった。
- ・周りの友だちやメンターと、一緒にカヌーをしたりバーベキューをしたりして昨日より仲が深まったと思いました。
- ・周りの人たちが、色々な人に話し掛けていて自分ももっと話せるようがんばりたい。
- ・カレーづくりの火をつける体験で、周りの人たちがほめてくれて、楽しかった。

こういった記述からは、過去の自分や周囲の状況と向き合って変化を実感したり客観視したりする様子が認められる。また、身近に自分の目標となる存在を認めようとする姿勢もうかがえる。

追跡調査として、事業終了後約1か月を目処に、

保護者や適応指導教室の指導者に対してアンケートを実施した。その結果、「新しいことに挑戦したり知らなかったことを学んだりしようとする」姿勢や「大変なことでも根気強く取り組もうとする」姿勢が顕著に感じられたという回答が多く寄せられた。また、以下のような参加者の具体的な変容の姿が記されていた。

- ・学校の行事にも（一部）参加するようになりました。
- ・最近は特定の人としか付き合いがなかったが、いろんな方々とふれあうことができてよかった。
- ・キャンプ後は1日も適応指導教室へ通級しておらず、学校への登校を継続中です。
- ・キャンプ後の生活リズムや学習への取組が大きく変化しており、来年もどこかの場面で活躍したいそうです。

大館少年自然の家の事業では、プログラム内容を縮小した関係もあり、参加者からしおりに感想等を記述してもらう時間を確保することは難しかったが、保護者と適応指導教室の指導者に対する追跡調査アンケートから、「家族や友だちと元気にあいさつや会話をする」姿勢や「大変なことでも根気強く取り組もうとする」姿勢に、特に顕著な変化を感じたという回答が得られるとともに、以下のような意見も寄せられた。

- ・不登校の生徒が増えてきていると言われますが、身近なところでは気持ちを分かち合える仲間が少なく、孤立してしまいます。キャンプでは他の教室に通うお子さんとも知り合うことができ、うれしそうに話していました。
- ・(1回の事業期間を長くするのではなく) 1泊2日で年に複数回やってくださればいいなと思いました。

以上のように、地域の特性や、施設で行ったプログラムの特性に応じた成果と課題が明らかになった。

追跡調査アンケートから見えた、両プログラム共通の成果として、回答者計10名のうち9名が、「またこのようなキャンプがあれば参加させたい」と回答し、残り1名も「本人次第」と回答しており、本事業の継続的な展開を求めていることが確認できた。

事業後の推進会議や企画委員会では、今後も事業

を推進していくための課題として、主に以下の4点が指摘された。

- 課題1. 市町村教育委員会や県内の各適応指導教室との連携を密にし、児童生徒がより参加しやすい環境を整えるとともに、地域に根ざした事業展開を見据えること。
- 課題2. 参加者の宿泊への不安感を取り除くため、2泊3日だけでなく、日帰りと1泊2日程度のプログラムを組み合わせるような事業形態も模索し、柔軟に体験活動を実施していくこと。
- 課題3. 不登校傾向児童生徒を持つ保護者が、悩みや思いを共有できる場を設定すること。
- 課題4. 参加者の中には「数年ぶりで文字を書いた」「文字の読み書きが苦手だ」という者もいるため、しおりやアンケートの記入の際には、支援者がもっと寄り添えるような時間と配慮を工夫すること。

こうした課題は、令和2年度のキャンプの計画・実施に反映していくこととした。

(2)令和2年度のふれあいキャンプについて

【実施体制】

初年度の事業の成果と課題をふまえ、より効率的に意見交流を図りながら事業の成果を高めるため、推進会議と企画委員会を統合・発展させ、新たに「自己肯定感向上プロジェクト推進委員会」を設置した。

委員は、初年度から本事業に関わっているメンバーを中心に、前年度の課題へ対応するため、メンターを依頼している大学生にピアカウンセリングを指導している学識経験者や、初年度とは異なる地域の適応指導教室の指導者を新たに加えて構成された。

また、前年度指摘された課題1について、本事業を地域に根ざした事業として、持続可能な形で運営していく必要があることから、図6のように、市町村教育委員会・適応指導教室等との窓口として教育事務所が機能する実施体制の構築を目指した。

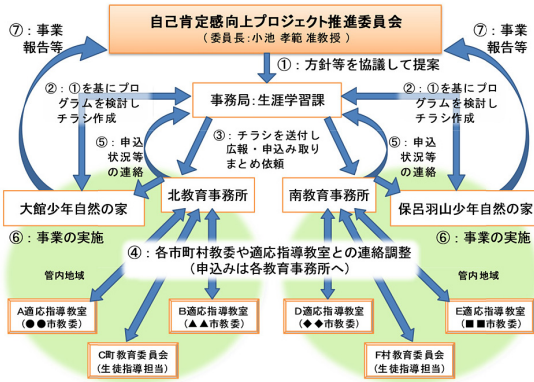


図6 令和2年度の実施体制のイメージ

【事前準備とプログラム立案の留意点】

課題2の指摘について、当初、保呂羽山少年自然の家は2泊3日で実施、大館少年自然の家は日帰りの体験2回に加えて1泊2日での宿泊体験活動を実施する、いわゆる「ホップ・ステップ・ジャンプ」型のプログラムを構想していた。

しかし、新型コロナウイルス感染症拡大の影響等により、2泊以上の宿泊が困難となったこと、また日帰りの活動のみでは事業の趣旨を達成することが困難であるとの理由から、両施設とも1泊2日のプログラムに変更し、図7に示したスケジュールで事業を展開することとした。

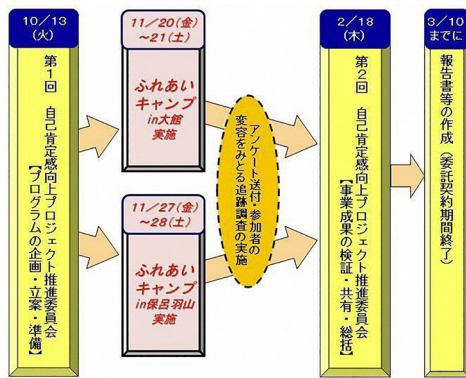


図7 令和2年度の事業スケジュール

また、課題3の指摘に対しては、保護者が相談したりネットワークを形成したりするための場を設定することとした。さらに、課題4の指摘に対しては、支援者としてのメンターの役割が非常に重要となった。そこで、表1に加え、表2に示したような工夫

表2 2年目から新たに留意・工夫したこと

①保護者のつどい	「ほっとミーティング」と称する保護者のつどいを、夜間や土曜日等、保護者が参加しやすい時間帯に設定して交流を図る。
②メンターの役割	・参加者の立場に寄り添い、活動への参加を後押しする心理的なサポーターとして、しおりやアンケート記入にも寄り添う。 ・プログラム中に「ピアカウンセリング」の時間を位置づけ、準備や進行を大学生が行う。
③プログラムの選択と柔軟性	どこまで参加するかという「時間」の選択、どのプログラムを体験したいかという「内容」の選択、どのようにプログラムに関わりたいかという「役割」の選択を明確化し、自由な自己選択に基づく参加を促す。
④参加費用	家計の事情等により参加が阻まれることがないように、児童生徒の参加費用を全て無料とする。

も施しながら、事業を実施することとした。

【事業当日の様子】

大館少年自然の家（県北・大館市）での実践

先行して実施した大館少年自然の家においては、図8に示したプログラムを実践した。8名が参加し、このうち4名は宿泊を希望（1名は夜からの参加を希望）した。

最初は、プロジェクトアドベンチャー（PA）の手法を活用し⁵⁾、初めて出会った相手とも仲良くなるための交流ゲームからスタートした。

「チャレンジ・アウトドア!」「ホップ・ステップ・アウトドア飯!」では、調理活動・火おこし体験・段ボールピザ釜でのピザ焼き体験・食事までの

11月20日(金)【1日目】	11月21日(土)【2日目】
★駅から送迎バスに乗るか現地集合かを選んでね!	8:00 起床・部屋掃除
13:00 入所式・事前アンケート	9:00 みんなで作らんち・タイム オシャレに手作りプランチを楽しもう!
13:30 交流ゲーム～PAでみんな仲良くなる～	10:00 オリジナル工作作り体験! ①スマホスタンド作り ②竹ペン立て作り どどちらかを選んでね。
14:00 チャレンジ・アウトドア! 「ピザ生地作り係」と「焼きそば係」に分かれて活動するよ! 終わったら、みんなでマッシュマロ焼きを体験してみよう!	11:30 事後アンケート・退所式 ★駅までは送迎バスもあるよ。 お家の人に迎えに来てもらってもいいよ!
16:00 ホップ・ステップ・アウトドア飯! 自分で仕込んだ「ピザ」と「焼きそば」を完成させよう! (持ち帰りでもできるよ。)	17:30 夕食(アウトドア飯)
17:30 夕食(アウトドア飯)	19:00 自然の家スペシャルイベント みんなで夜店体験をしてみよう!一緒に活動してくれる大学生の皆さんによるピアカウンセリングもあるよ。
20:30～入浴・学習等 22:00 就寝	※今年度は保護者の方の情報交換の場として「ほっとミーティング」を行います。教育事務所のSSW(スクールソーシャルワーカー)や、他の保護者の方々との話合いの場ですので、どうぞ御参加ください。【希望制】

図8 令和2年度のふれあいキャンプin大館のプログラム内容（事業広報チラシより抜粋）

一連の流れを体験するステップ型を意識したプログラムとした。全員がピザ生地作り係を選択し、トッピングに工夫を凝らしたオリジナルピザをつくっていた。

その後、メンターによる「ピアカウンセリング」を実施した。ピアカウンセリングとは、相談者と同年代だったり、同じような背景を持っていたりする「ピア（peer、仲間）」が、価値観を共感・共有し、悩みや不安を分かち合いながら、生き方や悩みへの対応について考えたり、判断や行動のプロセスに寄り添ったりする、いわゆる「仲間相談活動」のことである。前年度に引き続き、メンターを依頼した大学の学生たちは、授業や地域貢献活動の一環として「思春期ピアカウンセラー」の養成講座を受講しており、カウンセリングの場づくり・進行・内容の説明・児童生徒への対応を主体的に行っていた。成果等の詳細については、後述する。



図9 ピアカウンセリングの様子（大館）

日帰り参加者が帰宅後、次のプログラムを実施する前に、夜から参加する生徒を参加者全員で出迎えた。初めての出会いとなるため、どのように交流を促すべきか心配したが、出迎えた側の児童生徒が、率先して館内を案内したり声を掛けたりして、すぐに打ち解けている様子が見受けられた。

そして、「自然の家スペシャルイベント」として夜店体験を実施した。レクリエーションホールを会場に、射的・スーパーボールすくい・ヨーヨーすくい・チケット交換の四つの夜店が設けられた。参加者は、自分の手持ちのチケットの分だけ、各ブースの体験をすることができ、チケットが無くなったら、チケット交換の夜店で課題をクリアすると新たなチケットがもらえる仕組みであった。参加者は、ランタンやキャンドルファイヤーの灯りによって、本物

の祭りの夜店のように再現された会場を見て、感動と興奮を覚えた様子だった。また、メンターや友人とともに、何度も体験コーナーを回り、夜店体験を満喫していた。

この体験活動においても、「どの体験をしたいか」「次はどうするか」というような自己選択と自己決定の場面が多く設定されていた。今回、参加できたのは4名であったが、もう少し人数が多い場合は、全員が客になるだけでなく、店員と客の役に分かれて、前半と後半で交代しながら双方の役割を体験する活動としての発展も期待できるものと思われる。



図10 夜店体験の様子（大館）

2日目は、朝食の時間を遅らせ、ゆっくりと朝の活動に入ることができた。また、各自のデザインによるオリジナル工作を丁寧に仕上げ、お土産にすることができた。

「ほっとミーティング」は、複数の時間を設定し、保護者が利用しやすい時間を選んで相談できるようにしたが、残念ながら今回は希望者がいなかった。

保呂羽山少年自然の家（県南・横手市）での実践

保呂羽山少年自然の家においては、図11に示したプログラムを実践した。12名が参加し、このうち11名が宿泊を希望・1名は日帰りを希望していた。しかし、日帰り希望の参加者が、活動に参加する中で「友人と一緒に宿泊したい」という意志を示した。そのように自己決定できたのは、本人の成長の証であると捉え、適応指導教室の指導者・保護者とも相談して、全員宿泊することとした。

前年度、好評であった活動内容の選択や、役割の選択については、今年度も継続して取り組むことにより児童生徒にも浸透してきたようだ。前年度は、選択肢を示しても、結果的に全員が同じプログラムを体験するというケースもあったが、今年度はほと

んどの場面でそれぞれの興味・関心に応じた選択に分かれて活動することができた。

11月27日(金)【1日目】		11月28日(土)【2日目】	
★朝から送迎バスに乗るの現地集合かき選んでね!		7:00 起床・部屋掃除 7:30～朝食(館内食)	
13:00	入所式・事前アンケート	9:00	大学生の皆さんとのふれあいタイム 一緒に活動してくれる大学生の皆さんによるピアカウンセリング!
13:30	交流ゲーム～PAでみんな仲良くなる～	10:00	自然素材でクリスマス工作! ～次の1・2から選べる～ ①:クリスマスリース作り体験 ②:ミニクリスマスツリー作り体験
14:00	おやつタイム! 木こりのローソクでマッシュロッキーをやってみよう。	11:00	チーズ & チョコフォンデュ パーティーを楽しもう!
14:30	自然の家スペシャルメニュー! ～次の1・2から選べる～ ①:スマイルボーリング体験 ②:化石掘り体験	12:30	事後アンケート・退所式
15:30	バーベキュー・ディナーの準備をしよう! 「買い出し係」と「飾りつけ係」のどちらの役割で準備をしようかな?	★朝までは送迎バスもあるよ。 お家の人に迎えに来てもらってもいいよ! ※保護者の方向けに「ほっとミーティング」を行います。教育事務所のSSW(スクールソーシャルワーカー)や、他の保護者の方との情報交換ができます。どうぞ御参加ください。【希望制】	
18:00	夕食(バーベキュー)		
19:00	キャンプファイヤー & 星座観察タイム		
20:30～入浴・学習等 22:00 就寝			

図11 令和2年度のふれあいキャンプin保呂羽山のプログラム内容(事業広報チラシより抜粋)

特に「バーベキュー・ディナーの準備をしよう!」というプログラムにおいては、全員を2グループに分けてグループごとにバーベキューのメニューを決めた後、買い出し係は買い物、飾りつけ係は食堂の装飾を行うという手順をたどった。買い物に出た者は、自然の家に残って飾りつけをしている友人のことを思いながら、「〇〇が食べられないと言っていたから、△△にしよう」などと、相談しながら買い物を進めていた。また、飾りつけを担当した者は、買い物から帰ってくる友人のことを思いながら、会場の装飾のみならず「帰って来たらピアノを弾いて音楽で出迎えてあげよう」などと、自分たちで工夫しながら企画を立てる場面もあった。お互いにお互いの役割を認め合い、自分の立場で友人のためにできることをしようという意識は、自己肯定感や自己有用感につながると感じた。

食材を調理し、自分たちで考えたメニューの夕食をとった後、キャンプファイヤーや星座観察に移ろうとした際に、参加者からスタンツ(出し物)をやりたいという提案があった。これは、所属する適応指導教室側で自主的に準備していたもので、事業主催者にとってもサプライズな企画であった。参加者のうち5人が3組に分かれ、それぞれ身体表現、マジック、ダンスと、特技を生かしたスタンツを披露した。披露した本人たちも、観客として見ている我々も、自然とお互いに笑顔になり大いに盛り上がった。友人にこのような一面があることを知ることができ、参加者全員が心温まる時間を過ごすことがで



図12 スタンツの様子(保呂羽山)

きたと思われる。

これは、適応指導教室側が、本事業を単に宿泊体験の機会としてのみならず、児童生徒の自己表現の場として位置づけたり、価値づけたりしてくれていることの象徴であると捉えている。また、昨年度も参加した児童生徒が、率先して友人とスタンツに参加する姿もみられ、成長を感じることができた。このことによっても、参加者にとっての体験活動の意義や有用性がより高められているものと判断できる。

翌日のプログラムでは、「ピアカウンセリング」「自然素材でクリスマス工作!」「チーズ&チョコフォンデュパーティーを楽しもう!」という活動と同時並行で、別室にて「ほっとミーティング」を開催した。当初の申込みは3名であったが、このうち実際に参加された保護者は2名であった。この場合は、教育事務所のSSWと特別支援教育担当の指導主事が担当し、アットホームな雰囲気で行われた。保護者からは、思春期特有の子どもへの対応に対する悩みや、兄弟間の関係性についての悩み等が打ち明けられ、

保護者同士の情報交換もなされた。参加した保護者からは、「もっと堅い雰囲気を想像しており出席するか迷ったが、参加して良かった」などの感想が寄せられていた。

退所式では、昨年度挙手をして御礼を述べた参加者が今年度も継続参加しており、再び御礼を述べられる場面があった。躊躇する様子がなく、以前よりしっかりと自己表現ができるようになっていた。また、適応指導教室の指導者によると、当該の生徒が、最近学校への登校を継続できているとのことであった。

【両プログラム実践の成果と課題】

令和2年度の事業成果の一つとして、両プログラムで、メンターによる「ピアカウンセリング」を取り入れたことが挙げられる。大館会場・保呂羽山会場の双方で大学生たちが行ったカウンセリングの手法は、「ライフライン」と呼ばれるものであった。これは、自分自身の幸福度（ハッピー度）を縦軸に、年齢を横軸にしたグラフ用紙を用意し、自分のこれまでの人生とこれからの人生についての幸福度や満足感を、1本の線に描いていくという活動である。

不登校傾向児童生徒の場合、過去の辛い経験から自分の幸福度を表現することが難しかったり、明るい将来を見通すことができなかつたりする場合もある。実際、今回のピアカウンセリングでも、思うようにラインを描けなかつたり、手元ではラインを描いたものの言葉にして周囲に伝えることができなかつたりして、その場で泣き出してしまう児童生徒がいた。しかし、それは真剣に自己の内面や過去の経験に向き合おうとしている証であり、この活動の意義そのものでもある。そういった児童生徒には、メンターが寄り添いながら「一生懸命取り組んでくれてありがとう」というような声掛けを行ったり、適応指導教室の指導者がそばで見守りながら可能な範囲で活動を継続したりする姿が見られた。また、「最初は、ピアカウンセリングが不安だったけれど、それぞれのライフラインを知ることができておもしろかった」という感想をしおりに書いている者もあり、自己表現と他者尊重を経験できるプログラムになったことが読み取れる。

課題としては、児童生徒の個別の背景等の個人情報について、カウンセラーとなる大学生たちと事前はどこまで共有できるかという問題が挙げられる。また、この活動は大学生が主体的に行うことに意義

があるため、周囲の大人の関わり方について、予め情報を共有しておくべきであった。

また、児童生徒のしおりの感想によれば、プログラムの体験について、以下のような記述が見られた。

【大館】

・（あなたが、今日の自分に声を掛けるとしたら…という問いに対して）緊張しないで大丈夫だよ。

【保呂羽山】

- ・キャンプファイヤーがとても癒されて、火は怖いものと捉えていたけれど、美しいと感じた。
- ・ダンスを披露するのが不安で、緊張しすぎてしまったけど、いい体験ができてよかった。
- ・買い物ができるか不安だったけれど、〇〇さんの買い物の仕方がとても上手だったので不安を忘れるくらい楽しかった。

こういった記述からは、参加する前に自分が描いていたキャンプのイメージと、実際に参加して抱いた感想を比較して大きな変容を実感していることがうかがえる。また、今回の体験活動が、「価値観の変容に迫る体験」・「自分自身に負荷をかけて乗り越える体験」・「他者の姿に学ぶ体験」として機能したことも読み取れる。

他にも、選択した活動・体験した内容によって「得意だったことをもっと楽しめるようになった」「集中力のある自分に気づくことができた」といった感想も寄せられており、参加者が個々に今回のキャンプの体験を自分の中で価値づけることができているのではないかと感じた。

保護者や適応指導教室の指導者に対する追跡調査アンケートでは、以下のような声が寄せられている。

- ・今回たくさんの自信がついたと思うので、これからの受験勉強のやる気にもつなげてほしい。
- ・様々な困難を乗り越えようとしている子どもたちのために、このような場は重要なので、ずっと続けてもらいたい。
- ・保護者参加の場もつくってもらいたい。
- ・先輩たちとの思い出をつくりたいという気持ちが参加のきっかけだったが、参加に当たり食事の準備等に興味を持ち手伝うようになった。
- ・コミュニケーションが苦手だが、集団で何かをする時に自分から仕事を見つけて行動できるようになってきた。

- ・最初は初対面の人たちとの体験活動を不安に思っていたのだが、キャンプ後は「いろいろな人と会って視野を広げることができた。また参加したい」と話していた。
- ・(大館の夜店体験で…)「人目が気になって外に出たくなかった」と言っていた児童が「最高だ!」と感激して楽しむことができていた。

事業全般に関する意見から、個別のプログラム・日程等に関する意見まで様々なものがあつたが、多くは児童生徒の具体的な変容の姿についてであった。

今年度から始めた保護者のための「ほっとミーティング」については、開催形態の工夫により、体験プログラムにも保護者が参加できる可能性が広がると考えている。具体的には、児童生徒が野外炊飯で食事の準備をしている間に、別の会場で「ほっとミーティング」を開催し、終了後は児童生徒が準備した食事を一緒に食べてもらうなどの案が想定される。

4 まとめと今後の展望

2年間の実践について、参加者数の変化等について

てまとめたものが表3である。これをもとに、まとめと今後の展望として3点指摘したい。

第一は、継続実施することの意義についてである。大館会場・保呂羽山会場ともに、「実参加児童生徒数」「宿泊した児童生徒数」が増加していること、また、大館においては「参加市町村数」が増え、より広域に事業が浸透していることが分かる。保呂羽山においては「ほっとミーティング」への保護者の参加があつたことで、こういった事業や相談の機会に関心のあることがうかがわれる。少しずつではあるが、この2年間で着実に地域に根ざした事業としての展開を見せている。

今年度、大館会場に参加したある生徒が、「人数は少なかったが、いい意味で思っていたのと違うキャンプで工夫がなされていた」という感想を適応指導教室の指導者に打ち明けたことを聞いた。また、保呂羽山会場の参加者には、前年度参加した児童生徒もおり、「今年も楽しみにしていました」という声が聞かれた。児童生徒自身が楽しみにしているキャンプ、そして周りにその楽しさを伝えてくれるキャンプとして定着していくためにも、こういった機会を継続的に設けることが必要であると考えられる。

表3 ふれあいキャンプの参加者数等に関する2年間の比較

	項目等	令和元年度【第1回】	令和2年度【第2回】
大館会場	申込児童生徒数	5名	9名
	実参加児童生徒数	4名(当日欠席1名)	8名(当日欠席1名)
	(そのうち小中学生の比率)	小学生:0名 中学生:4名	小学生:2名 中学生:6名
	宿泊した児童生徒数	0名(※事業自体を日帰りで実施)	4名
	(そのうち小中学生の比率)	小学生:0名 中学生:0名	小学生:2名 中学生:2名
	参加市町村数	2市(1教室・1フリースクール)	4市町(1教委・2教室・1フリースクール)
	宿泊した適応指導教室等の指導者数	0名	1名
	参加したメンター数	2名(女性メンター:2名)	4名(女性メンター:4名)
	「ほっとミーティング」参加保護者数	【実施せず】	0名
保呂羽山会場	申込児童生徒数	9名(※このほか保護者1名)	12名(※このほか保護者1名)
	実参加児童生徒数	9名	12名
	(そのうち小中学生の比率)	小学生:3名 中学生:6名	小学生:3名 中学生:9名
	宿泊した児童生徒数	6名	12名(※日帰り希望から変更した1名含む)
	(そのうち小中学生の比率)	小学生:2名 中学生:4名	小学生:3名 中学生:9名
	参加市町村数	1市(2教室)	1市(2教室)
	宿泊した適応指導教室等の指導者数	4名	4名
	参加したメンター数	3名(女性メンター:3名)	4名(女性メンター:4名)
	「ほっとミーティング」参加保護者数	【実施せず】	2名

第二は、事業の実施形態と内容についてである。この2年間で、2泊3日、日帰り、1泊2日という3種類の形態を実践することができたが、不登校傾向の参加者・保護者の負担感を考慮しつつ、自然の家での宿泊体験活動の成果を効果的に味わうためには、1泊2日程度の日程が受け入れられやすいと感じた。もちろん、ダイナミックなプログラムを取り入れたり、体験活動の効果を高めたりするには、2泊以上の多泊型プログラムが望ましいと思われるが、その点に拘泥すると、そもそもこういった体験活動の機会に参加することが難しい児童生徒も多い中で、事業の本質を見失ってしまうことにもなりかねない。

限られた時間や選択的な参加であっても、自己選択・自己決定してその場に集うという第一歩を支援することが重要である。そのためには、選択式プログラムも継続することが必要であろう。特に、「役割」の選択が可能なプログラムでは、参加者が自分の得意分野を生かせる場面、他者の役割等を理解して相互に尊重し合う場面、自己肯定感や自己有用感を得るのに直結する場面となる可能性が高いので、意識的にプログラムに取り入れてみるのも効果的である。

第三は、学校教育と社会教育の連携・協働による不登校の事業として、さらに発展させていくことの重要性についてである。本事業は生涯学習課が実施したものであるが、義務教育課の主催する「全県指導主事等連絡協議会・生徒指導部会」や「適応指導教室等ネットワーク会議」において事業報告や広報を行っている。また、適応指導教室の指導者はもちろんのこと、教育事務所の生徒指導担当、特別支援教育担当の指導主事や市町村教育委員会の指導主事等との連携も図っている。事業実施中には、キャンプに参加している児童生徒の在籍校から、先生方が様子を見に来て一緒に活動・交流する場面があった。また、事業終了後には、各学校に対して当該の児童生徒が本事業に参加することができた旨を写真等で伝え、情報共有を図っている。

冒頭にも述べたように、不登校に対しては多面的・重層的なアプローチが求められており、児童生徒の自己肯定感向上のための一つの機会として、本事業のような社会教育的アプローチも認知されると、今後、継続的・発展的に事業展開できるものと思われる。学校教育と社会教育のより一層の連携・

協働により、不登校で悩んでいる地域の児童生徒や保護者を支えるネットワークをより強固なものにしていくことが重要である。

以上、「ふれあいキャンプ」の実践を通して、不登校の児童生徒に対する生涯学習・社会教育からのアプローチの有効性と課題について検討してきた。また、その実施のための実践的プログラムに関して得られた知見、さらに、それぞれの地域・施設での事業のスキーム、連携先との関係構築の在り方についても紹介してきた。

ただし、不登校の要因は多様であり、本実践でも、地域間での違いがあるなど、本論文のプログラムを含む取組は、あくまでも一例に過ぎない。また、本論文で検証した有効性も、2年間の実践事例に基づいた質的分析が中心である。そのため、今後、本事業を継続していく中でデータを蓄積し、量的な分析を試みるとともに、本キャンプへの参加を通じた児童生徒の変化を、継続的に丁寧に把握していきたい。こうした課題については、他日を期して取り組みたい。

注

- 1) 前掲調査及び平成30年度・令和元年度「秋田県の不登校、いじめ、暴力行為の状況について」(秋田県教育庁義務教育課)による。
- 2) 秋田県では、これまで少年自然の家等の「セカンドスクールの利用」を推進してきた他、ネット依存傾向にある児童生徒のための「うまホキャンプ」の実施や、道徳の教科化に伴った「プロジェクトアドベンチャー(PA)等の体験活動を通じた道徳教育推進事業」に取り組んできた。なお、PAについては注5を参照のこと。
- 3) 令和元年度は、「青少年の体験活動の推進『体験活動推進プロジェクト』自己肯定感向上プロジェクト」の事業名で委託を受けた。
- 4) 少年自然の家協議会議とは、少年自然の家の運営等に地域住民が参画し、施設職員のみならず地域の方々との連携・協働によって、施設の持続可能な運営を目指すために設置されている合議体である。
- 5) プロジェクトアドベンチャー(PA)とは、アメリカで開発された教育プログラムで、人間関係を築く上で大切な「信頼する心」の育成や、人間としての成長に必要な「気づき」を効果的に

体験することができる手法である。秋田県では、いずれの県立少年自然の家においても、PAを体験することができる。

謝 辞

この2年間の実践と本論文の執筆に当たり、有益な御意見・多大なる御支援をいただいた多くの関係者の皆様に、深く感謝申し上げます。

参考文献

- 秋田県教育庁義務教育課 (2019) 「平成30年度秋田県の不登校, いじめ, 暴力行為の状況について」
 秋田県教育庁義務教育課 (2020) 「令和元年度秋田県の不登校, いじめ, 暴力行為の状況について」
 梶原豪人 (2020) 「貧困家庭の不登校をめぐる研究の動向と課題」『社会福祉学』第61巻第2号, 日本社会福祉学会, pp.59-70
 栗林 守・鎌田 信・田仲誠祐 (2020) 「秋田県における少年自然の家の役割と課題についての一考察」『秋田大学教育文化学部研究紀要 教育科学部門』第75号, pp.17-23
 国立教育政策研究所 生徒指導・進路指導研究センター (2015) 「生徒指導リーフ シリーズ Leaf.18 「自尊感情」?それとも「自己有用感」?」参照日: 2020年12月24日, 参照先: 国立教育政策研究所: <https://www.nier.go.jp/shido/leaf/leaf18.pdf>
 国立青少年教育振興機構 (2014) 「『青少年の体験活動等に関する実態調査』(平成24年度調査) 報告書」. 参照日: 2020年12月25日, 参照先: 国立青少年教育振興機構
 HP: http://www.niye.go.jp/kenkyu_houkoku/contents/detail/i/84/.
 国立青少年教育振興機構. (2015). 「高校生の生活と意識に関する調査報告書ー日本・米国・中国・韓国の比較ー」. 参照日: 2020年12月25日, 参照先: 国立青少年教育振興機構
 HP: http://www.niye.go.jp/kenkyu_houkoku/contents/detail/i/98/
 地井和也 (2011) 「中学生の登校回避感情と自己肯定意識の関連についての調査」『人文』第9号, 学習院大学
 文部科学省 (2017) 『平成28年度「文部科学白書」』参照日: 2020年12月25日, 参照先: 国立国会図書館デジタルコレクション:

<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/11340733>
 文部科学省初等中等教育局児童生徒課 (2020) 「令和元年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」

Summary

In Akita Prefecture, the number of school refusal children is increasing yearly, although the people concerned are making various supports.

We can often see several trends for school refusal children. As one of them, they have low self-affirmation or self-usefulness. Some scholars point out that the children have few real experiences in the nature, in the society, and so on, so they feel loneliness or anxiety for communication.

For this situation, Lifelong Learning Division Akita Prefectural Bureau of Education has begun a program with experience activity. They planned this program for participants to be able to learn how to communicate with others, based on self-selection and self-determination at their own pace. And it planned and executed, by using functions of Akita Prefectural Youth Outdoor Learning Center, to the maximum.

As a result of this project, we could be checked that participated children had increased their self-affirmation. In addition, this result suggests us that an approach by the field of lifelong learning or social education is useful for School Refusal Children.

Key Words : School refusal, Self-esteem (Self-affirmation and Self-usefulness), FUREAI camp, Youth outdoor learning center, Social education

(Received January 12, 2021)

※本研究には、JSPS 科研費17K04602の助成による研究成果が含まれています。